

行政視察報告書

| | | | |
|-------------------|---|-----|-----------------------------|
| 委員会名（会派名） | 新風つばめ | 報告者 | 小林由明議員、大島靖浩議員、小林秋光議員、稲村隆行議員 |
| 視察日程 | 令和 6 年 1 月 29 日 ~ 1 月 31 日 | | |
| 調査事項 及び 視察地 | <p>①国会議事堂と両院議員の在り方について</p> <p>②衆議院第2議員会館 鷺尾 英一郎 事務所 今後、特に地方自治体が取り組むべきと思われる課題について</p> <p>③東京大学教育学部附属中等教育学校 学生が主体性を持って学ぶために行っている独自の指導方法について</p> <p>④東京都豊島区 としまキッズパーク及びIKEBASU 障がいの有無や年齢に関係なくみんなが一緒に遊ぶことができる公園と電気バス交通インフラ整備について</p> <p>⑤特定非営利活動法人サンカクシャ 若者支援を行う事業内容と取組について</p> | | |
| 参加議員（委員） | 小林由明議員、齋藤信行議員、大島靖浩議員、小林秋光議員、稲村隆行議員、齋藤和也議員、岡山秀義議員（1月30日から参加） | | |
| ① | <p>【調査目的・内容】 国会議事堂と両院議員の在り方、細田健一代議士及び鷺尾英一郎代議士との意見交換、参議院における予算委員会傍聴</p> <p>【所感】 現在の国会議事堂は大正9年（1920年）に着工し、17年の歳月をかけて昭和11年（1936年）に完成した。費用については、当時の金額で2,573万6,000円であった。 建物は高さ、206.36メートル、奥行き88.63メートル、中央塔の高さは65.45メートルである。 国会の役割としては主権者である国民を代表する選挙された議員による唯一の立法機関である。 国会議事堂は正面に向かって左側が衆議院、右側が参議院となっており、左右対称的な構造となっている。両院制を採っていることから「車の両輪」などにたとえられている。 日本の国会を構成する両議院の議員は、両者とも「全国民の代表者」（憲法43条）であり、「衆議院は参議院に比べた優位性が高い」と思われるが現在の両議院議員の選挙区選挙をみると、衆議院では比較的小規模な選挙区を基盤とする小選挙区を採る一方、参議院では、都道府県を基盤とする選挙区制度を採用するなど、両院で少し違った形態をとることで「全国民の代表」の意味が少し違った見方もできる。また、両院で与野党勢力の多数派が逆転した場合には、「参議院の強さ」がどのように変化するかも今後の視点である。 こうしたことを踏まえ、議場における議員の座る位置・方向などを規定する議場構造に注目した憲法学の研究などもある。 我が国の場合、衆参両院ともに、中央の演台に向かって扇形に座席が並べられ、同一政党の議員は、扇形のグラフを書き表すのと同じように近場の席に座ることが求められる。こうした議場の構造が議員の審議や意思決定にどのような影響を与えるかなど改めて場の持つ力（パワー）を認識することができた。 なお、細田代議士、小林代議士及び鷺尾代議士らの便宜により参議院における予算委員会を傍聴できたことに感謝を申し上げ所感とする。</p> <p>【参考文献】 参議院ホームページ「国会議事堂案内」 国会国立図書館ホームページ「資料に見る日本の近代～開国から戦後政治までの軌跡」 Web論評日本（新井誠）</p> | | |

【調査目的・内容】

国からみた、地方公共団体が今後取り組むべき課題について、長年燕市に事務所を構え活動されてこられた、衆議院議員鷲尾英一郎氏にレクをお願いした。

具体的内容は、産業のまち燕市にとって大きな課題である「人材確保」を取り巻く法改正などについて。

【所感】

要望差し上げたレクの内容は「今後特に、地方自治体に取り組むべきと思われる課題」という大雑把なものであったが、産業のまち燕市が抱える大きな課題であり、市の存続発展を支える産業の根幹ともいべき「人材確保」について国の動向をご教示いただいた。

現在、地方や中小零細企業を中心に人手不足が深刻化し、外国人が我が国の経済社会の担い手となっているという実情がある。国際的な人材獲得競争が激しさを増している中では、我が国は、外国人材の確保について正面から検討すべき段階に来ている。

生産性向上や国内人材確保のための取組を行ってもなお人材を確保することが困難な状況にある産業上の分野において、一定の専門性・技能を有し即戦力となる外国人を受け入れていく仕組みを構築するために特定技能制度が創設されている。

そうした状況を踏まえつつ、法律に基づく検討を行う時期に差し掛かった技能実習制度及び特定技能制度の施行状況を検証し、課題を洗い出した上外国人材を適正に受け入れる方策を検討するため、外国人材の受入れ・共生に関する関係閣僚会議の下に技能実習制度及び特定技能制度の在り方に関する有識者会議が設置され、令和5年11月30日政府への提言として、最終報告書が関係閣僚会議へ提出されるに至っている。

本提言には、技能実習制度を人材確保と人材育成を目的とする新たな制度とするなど、実態に即した見直しとすることなどの大きな4つの方向性と、10の提言が盛り込まれている。

② 「特定技能」のうち、熟練した技能がある「2号」について、政府は令和5年6月9日、受け入れる対象を2分野から11分野に広げることを閣議決定しているが、本提言を受け法改正が行われる可能性もあり、産業のまち燕市においては特段の注視が必要である。

また、特定技能2号は家族帯同が認められており、家族で日本に永住する外国人の増加が想定されることから、高度人材を獲得しようとしたときには、地域生活の在り方についての課題を洗い出し、共生社会の構築も急務であることを強く感じることであった視察となった。

[○技能実習制度及び特定技能制度の在り方に関する有識者会議最終報告書](#)

[○特定技能2号の対象分野の追加について（令和5年6月9日閣議決定） | 出入国在留管理庁](#)

[○特定技能制度 | 出入国在留管理庁](#)

【調査目的・内容】

主体的、探求的な学びを実践し、生徒から人気が高いと評判の東京教育学部附属中等教育学校を訪問し、指導方法やポイントを調査し、本市の教育に活かす。

【概要】**【東京大学教育学部附属中等教育学校（以下、東大付属）の沿革】**

中野区にある国立の中高一貫校。起源は1921年(大正10年)に創立した7年制の官僚スーパーエリート校であるが、戦後GHQの指導による学校改革に伴い1948年(昭和23年)に国立の男女共学普通校「東京大学附属中学校」として再編された。中高一貫教育を牽引する存在であり、2000年から国内初となる現在の中等教育学校(※1)の形態となる。

(※1)：中等教育学校は、中高一貫校の中の一つの形態であり、中学校、高等学校という分類がないのが特徴。6年間で一つの学校とみなすため、3年目と4年目の間に卒業・入学の切れ目がなく、最も継続的に指導計画を立てられる形態。

【東大付属の特徴】

・高偏差値の子供が入学する都内の他の大学附属中学校とは異なり、都内の中高一貫校の中では偏差値が最も低くなっている。

・教員の価値観として「生徒に本質を学んでほしい、本物を学んでほしい」という文化があり、各教員がそれぞれの教科の面白さを追求しながら授業を行っている。

・各教員が座席レイアウトをコの字型にしたり、小グループ形式にするなど、教科ごとに自由に変更することにより、授業中の生徒同士のコミュニケーションを活発にして協働的な学びを実践している。

・レベルが高く簡単に解けない問い「ジャンプの課題」を各授業になるべく入れ込み、生徒同士が話し合っ

て答えを導き出す機会を設けて協働を促している。

・双生児の入学枠を設けて実施されている双生児研究や「CASEER」(※2)など、東京大学の知的資源を活かした取り組みを行っている。

③ (※2)：紙媒体としてのこっている過去の膨大な試験結果や体力測定結果等のあらゆる情報をデータ化・分析し、活かす取組。これを活用し、コロナ禍が生徒に与えた影響について分析し、生徒の体力が2年分衰えている等の結果を発表した。

【教員の採用・スキルアップについて】

・通常の学校とは異なるスタイルであるため、採用の段階で模擬授業を実施し、適正を検査している。一般的な私立学校と同様に転勤がない。

・教員同士でお互いの授業を見学し合い、意見交換を実施している。その際、教科の枠を取り払うことで教科が変わると生徒の表情や学ぶ姿勢が変わること、また、同じ生徒でもそれぞれの教員から見たときの生徒の捉え方が違うということを認識・共有しながらそれぞれの授業に活かしている。

【生徒へのプラスの効果】

・生徒同士の関わりを多くすることにより、一体感、連帯感が高まり、主体的・意欲的に学ぶ生徒が増えている。その結果、学ぶことが楽しいと感じ、研究者を志す生徒も多くなっている。

【所感】

授業の様子を見学し、多くの生徒が楽しそうに学んでいる姿が印象的で、本市の教育現場の参考にできる部分もあると感じた。教育委員会と今回の視察内容を共有し、活かしていきたいと考える。

【調査目的・内容】

令和2年9月にインクルーシブ公園(※1)として整備され高い人気を得ている「としまキッズパーク」と連携事業である電気バス「IKEBASU」を視察し、導入経緯や運営状況、課題を調査し、本市の公園整備、交通インフラ整備に活かす。

(※1)障がいの有無や年齢に関係なくみんなが一緒にあそぶことができる公園

【概要】**●としまキッズパーク**

独立行政法人 UR 都市機構の土地(造幣局跡地)を借りて令和2年9月に整備された期間限定のインクルーシブ公園。所在地は全国でも有数の木造住宅密集地であり、火災予防のため、防災公園整備の要望が以前からあった。

デザイナーの水戸岡鋭治氏にIKEBASUのデザインを依頼していたため、としまキッズパークのデザインも併せて依頼し、統一感を出した。

設計当初、インクルーシブ公園とする予定ではなかったが、令和元年8月に障がい者団体からインクルーシブに配慮した公園の要望があり、NPOと議会からの要望も受け設計変更した。

途中から設計変更したため、すべてがインクルーシブ対応となっていない。令和6年12月までの借用期限となっていたが、利用者の人気が高く2年間延長。

令和8年12月以降どのようにしていくかは未定。

●IKEBASU (イケバス)

コンセプトは環境に優しい電気バス。区民の足としてだけでなく、まちの魅力や価値を向上する目的もある。2017年から検討開始して2019年11月から運行開始。

交通量が多い池袋で9kmもの区間を走れるのかと心配があったが、ルート等を試行錯誤して課題をクリアし導入。

④ 現在までIKEBASUによる事故、渋滞は発生していない。コミュニティバスとは一線を画し、観光客、高齢者や障がい者も気軽に乗れる仕様となっている。

区内4つの公園や主要スポットをバスでつなぎ、歩いて楽しみ回遊してもらう狙いがある。デザインにもこだわっており、バス、キッズパーク、キャラクター、グッズを含めてトータルでデザインされている。

【運営状況】**●としまキッズパーク**

- ・未就学児から小学校低学年対象の遊具が備わっている。
- ・コロナ禍中に開園したため、予約制にして密集しないように配慮されている。
- ・利用時間は1時間。最大100人。平日の午前中は近隣保育園の利用者が多く、土日は区外からの利用も多い。
- ・予約の際、区内、区外枠を設け、区内の人が優先して利用できるようになっている。
- ・公園の入り口を1か所に絞ることで、多動症の人の飛び出しを防ぐ構造となっている。
- ・目が見えない人、耳が聞こえない人にもスタッフが声掛けして対応している。

●IKEBASU

- ・1回200円。子供、障がい者は半額。フリーパス券もあり。直近は5,000人/月程度が利用
- ・電車のように向い合せの座席。最大乗車人数21名。冷暖房なし。最高速度19km/h。
- ・夜間10時間程度区役所で充電。約60km走行可能。充電は一日中持つ。
- ・1日27~28便程度(1時間3~4便)運転手不足や車両整備で便数が減っている。
- ・池袋駅を中心に2ルート運行。

Aルートは1周30分、全長3km。Bルートは1周1時間、全長6km。

・乗務員付きで豊島区の文化スポットを回るツアーや保育科と連携した遠足ツアーなど、貸切事業も実施。

【導入費・運営費】**●としまキッズパーク**

- ・整備から解体までリース契約しており、総額5億2,000万円（令和6年12月まで）
- ・内訳は公園整備工事費2億7,000万円（オーダーメイドのため通常より高額）
運営費4,700万円/年（スタッフ5人体制）2年間延長した分の追加費用は調整中。
- IKEBASU
- ・運営費1億7,000万円から1億8,000万円/年。広告・運賃収入があるため支出は1億3,000万円から5,000万円/年（人件費、電気代等）車両は豊島区が所有。運営は公募で民間業者に委託。
- ・車両は1台3,000万円（ベースとなる車両を改造）10台あり、1台のみ黄色。内装が車両ごとに全部違う。
- 【課題】
- としまキッズパーク
- ・駐車場がない。土地が無いので割り切っており、民駐車場に止めてもらうように案内している。
- IKEBASU
- ・池袋駅に百貨店が2つ併設されており、駅の外に出ず街を回遊しない人も多い。
- ・毎年1億円以上の多額の財政支出。貸切事業・イベント開催を進め、収入を上げていかななくてはならない。
- 【所感】
- 平日に視察したが利用者が多く賑わっていた。地域の主要スポットをつなぎ、次の時代も踏まえた交通インフラを今後整備していくにあたって今回の視察での知見を活かしていきたいと考える。

【調査目的・内容】

若者支援を行う「特定非営利活動法人サンカクシャ」の事業内容と取組について

【事業の起源】

代表の荒井氏は大学1年生時からホームレス支援を積極的に展開し、特に若年のホームレスとの出会いが若者支援の重要性を浮き彫りにし、これを契機に2019年5月24日サンカクシャの設立に至る。

初期は単なる居場所提供から始まり、次第に学習支援、高校進学支援、就職へと着実に拡大している。

現在、サンカクシャは15歳から25歳の親や身近な大人に頼れない若者が孤立せず自立に向けた支援を行っている。

【活動内容】

●「居場所」

・サンカクキチは安心な交流拠点。ゲーム、漫画、楽器などが備わり、無料で提供され、水曜日、木曜日、土曜日14時から21時、火曜日は個別対応に主眼を置いている。

・夜行場所としての「ヨルキチ」はネットカフェで寝泊まりする若者のために月2回22時から翌朝まで解放されている。ゲーミングPC、漫画、ボードゲーム、仮眠スペースなどがあり、温かい食事と飲み物も提供され、家のようにつろぎの空間を提供している。

●「サンカクハウス」

・都内で4件のシェアハウスがあり、個室7部屋が提供され、総定員26人の住環境を提供している。

月5万円前後で入居可能。スタッフと住民が共同生活をし、ご飯づくりや食事の機会、個別面談などを通じて1年から1年半で一人暮らしの再建を目指している。

個室は3か月程度の短期滞在型も相談に応じ、生活環境の整備と必要な支援を提供し、自力での住居確保まで伴走している。所持金がない場合や緊急な場合の相談も受け付け、若者に最低限の生活を支える場を提供している。

●「サンカククエスト」

・企業との連携で仕事（クエスト）を提供し、若者と大人（伴走車）がペアを組み、仕事を体験するプログラム。クエストを通じて若者は誰かの役に立つ経験や喜びを感じ、人とのつながりを育み、また仕事の経験値を積み重ねていく。

これにより若者は自信を養い社会にサンカクするためのきっかけを得る。

●「アウトリーチ活動の柔軟な展開」

・サンカクシャは地域のニーズを把握し、指導者やボランティアと協力して若者に効果的なサポートを提供。

地域の声を活かした計画策定で個別の課題に適切に対応している。

●「共感と協力の醸成」

・地域参加型のイベントや協働プロジェクトを通じて、サンカクシャは地域全体と共感を促進。地域リーダーシップの育成により、共通の目標に向けて協力する文化が形成された。

●「DAISY BEANSカフェの成功」

・企業と連携して運営されている「DAISY BEANSカフェ」は、サンカクシャの成果を示す一例。

若者たちが中心となって運営するこのカフェは、地域住民との交流の場となり、地域へのポジティブな影響をもたらしている。

●「SNSでの繋がり」

・X（旧Twitter）やTikTok等で若者たちとのつながりを強化。これにより若者たちの認知が向

上し気軽に相談できる環境が整備されている。

【所感】

サンカクシャの支援活動は総合的かつ柔軟なアプローチで若者に成長の機会を提供し、企業連携やDAISY BEANSカフェの成功が地域との連携を強化しているように感じた。

一方、当市では親に頼れない若者への支援が必要であり、そのためには生活支援や仕事に関するサポート支援の周知が不可欠。今回の視察内容を担当課と共有し、今後活かしていく必要性を感じた。

【視察の様子】

①、②国会議事堂



③東京大学教育学部附属中等教育学校



【視察の様子】

④東京都豊島区



【視察の様子】

⑤ 特定非営利活動法人サンカクシャ

